

三原市歴史民俗資料館

三原のお宝 歳出しニユース

— 第 5 8 号 —

展示で分かる！三原のお酒



資料館に展示中の
三原のお酒資料

三原を代表する産業であったお酒造り。奈良時代末期に書かれた『万葉集』には、中国地方で造られたお酒について詠まれた歌があり、このころから酒が造られていたことがわかります。原料の米と水、そして気候に恵まれていたことが、お酒造りの発展につながりました。

三原でお酒造りが発達した経緯ははっきりしませんが、室町時代の資料に三原酒の記述があり、このころには三原でお酒が造られていたことがわかります。江戸時代中期の百科事典『和漢三才図会』には、「和州の奈良、摂州の伊丹・池田、賀州の菊川、備州の三原、皆芳醇の名を得」と書かれ、江戸時代には三原が五大産地の1つだったことを知ることができます。

三原の酒蔵は明治以降に増減を繰り返したものの、戦後には10軒近くありました。その後消費の落ち込みや、まちの開発などからその数は減り、現在は酔心山根本店の1軒のみになってしまいましたが、三原のお酒は県内外で高い評価を受けています。

資料館では、三原のお酒に関する貴重な資料を多数展示しています。



昭和39（1964）年、糸崎駅構内の様子。
線路沿いに三原酒の広告看板が並んでいます。

秘密いろいろ お酒のラベル

お酒を買う時に、まず目に飛び込んでくるのがそのラベルです。デザインや色など、様々な工夫がされています。おしゃれな見た目につられて買ってしまいう人も多いのではないのでしょうか。

ラベルの始まりは、明治初めに、伊勢湾周辺から東京に運ばれた樽酒にあると言われます。それまで灘の酒が中心だった東京に、新たに参入するためのアピール材料に活用しました。

銘柄と色あざやかな絵柄を描いたラベルを貼ったお酒は、多くの人の目を引いたことが想像できます。

もともと、ラベルは木版印刷で刷られていました。その後石版へ、そして写真製版とオフセット印刷へその方法は変化していきました。

また、樽から一升瓶へと売り方も変化したことで、ラベルの大きさも小さくなりましたが、銘柄とおめでたい絵柄を入れるという手法は、現代にも引き継がれています。

資料館で展示している色鮮やかで美しいラベルを見に、ぜひお越しください！



樽酒

一升瓶



三原市東町にあった蘭菊村上酒造場の「蘭菊」のラベル。周りに白い蘭と菊、紅色の桜が描かれています。



三原市東町にあった定森酒造場の「山陽」のラベル。ひょうたんは縁起物で、「六瓢息災」、「末広がりにすまひる」など商売繁盛を表わし、お酒を入れる酒器にも使われました。



三原市西町にあった大藤酒造の「旭水」のラベル。菊の絵は洋画家の巨匠、東郷青児氏が手がけています。

現在、資料館は休館しています。詳しくはHPをご覧ください。

<https://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/kyouiku/103968.html>

＜編集後記＞

4月から担当学芸員が代わり、タイトルも新しくしてお届けします。

今年度はお酒をテーマに、様々な資料をご紹介します。三原のお酒造りに触れていただければ嬉しいです。(み)

三原市歴史民俗資料館

三原市円一町 2-3-2
TEL0848-62-5595

